

『彼方の友へ』（伊吹有喜著）レビュー （一部抜粋）

◆今年一番泣けた本かもしれない。

最後に物語（人生）がつながった時、自分の心にも温かいものが確実に生まれた。それをけして忘れたくない。

——ブックメイツ新百合ヶ丘店 狩野大樹さん

◆読みおえて、こんなに楽しく清しい気持ちになったのは何年ぶりだろう。

そして一冊の本を作りあげるのには、なんて多くの人がかかわり、情熱を持って作っているのだろう。ハツさんありがとう。私も少しでも多くの人に本を読む楽しさを伝えられる手伝いをしたいと思います。

——丸善新宿京王店 柳さん

◆初めから終わりまでずっと面白い小説って実はそんなに

多くはないと思うのだが、本書はそんな稀有な存在である。

主人公の成長、徐々に大きくなる戦争の影。

時代に翻弄されながらも雑誌作りに情熱を

そそぐ登場人物たちの姿に頁をめくる手が止まらない！！

——大垣書店イオンモール KYOTO 店 辻香月さん

◆わくわく ときどき きゅんきゅんしながら読み進めました。「夢と情熱を胸に抱いた少女の物語」はその少女をめぐる人達の激動の物語でもありました。

はつらつとした波津子の姿の向こうには常に戦争の影がありました。「いつも何かわからないうちに何か起きていて、でも私だけが何も知らない」この言葉には私たち自身もうっすら感じる怖さがあります。

登場人物たちが個性的で生き生きしているだけに、直接は描かれない戦争という影の深さを感じずにはおれませんでした。激動の時を経て、大切に紡がれてきた思いや物が届けられるラストは何度読んでも（思い返すだけでも！）涙が出てしまいます。まさに「彼方の友へ」届いた宝物のような物語です。過去から現在へ、そして未来への贈り物となりますように。

——明林堂書店 JR 別府店 後藤良子さん

◆読んでいるうちに平成から戦中の東京明治へと吸い込まれるようでした。

少女の憧れが目の前に、大好きな雑誌の編集、憧れていた人が目の前に——。

現代とは違う世の中を懸命に生きる姿に少女を応援している自分がいました。

明治～昭和を生きた一人の少女の生きる人生はとても熱く、情熱が伝わってくる、そんな小説でした。昔の雑誌の編集の様子なども、興味のある人にはとても面白いと思います。

——うさぎや 栃木城内店 佐々木さん

◆第二次大戦の頃の空気感を出版に関わる人たちの目を通して感じることができました。

戦中であっても、目指すは「友へ最上のものを」。

この気概を忘れない彼等の運命は、今現在の私たちの運命と重ならないと誰が言えるでしょうか？ これは希望の物語です。

——文教堂 北野店 若木ひとえさん

◆雑誌作りとは、情熱そのものだった時代があったのだなあと感じました。そしてたぶん今よりずっと人々は、活字や情報を欲していたのだなと思いました。

「少女の友」はまさに人々の希望であり、あこがれであり、一つの文化だったのだと思います。やはり、別格です。

そしてその「少女の友」をモデルにして、取り巻く人々や時代の移り変わりを描いたこの小説は面白い！ あの時代だからこそできたこと、受け継がれていく情熱と夢。そしてモノを書くということは、目の前の今の読み手に対して書くだけでなく、活字は残り、はるか遠く時代を越えた読者にも届けるという使命があるということ。すごいです。伊吹先生が「少女の友」の存在にどれだけ心を動かされたのか、その感動がまさに伝わってくるような一冊でした。実業之日本社はすごいです。

——有隣堂伊勢佐木町本店 佐伯敦子さん

◆今こうして私たちが本や雑誌を自由に楽しめるのは、あの大変な時代を必死に生き抜いたハッチャンたちがいてくれたからなんだなあ、胸が熱くなりました。

——柳正堂書店甲府昭和イトーヨーカドー店 山本机久美さん

◆戦時、さまざまな圧力や規制と折り合いをつけつつ、掲げた理想と信念からぶれることなく、ただ読者＝友のために雑誌をつくり、物語やメッセージを届けつづけた波津子たちの姿勢に強く胸を打たれました。

遠く平成の現代を生きるわたしたちにも必要な物語だと思います。

——七五書店 熊谷隆章さん

◆あこがれを胸に「乙女の友」編集部へやって来た少女が編集者として、作家として、人間として成長していく姿を応援しながら読みました。

戦後再開した「乙女の友」を書店の人たちが仕入れて

帰っていく場面は、本を作ること、そしてそれを読者のもとへと届けることの喜びに満ちていて、思わず涙があふれました。エピローグ、暗号で

届けられた最後の恋文、「その言葉だけで生まれてきてよかった」という波津子の喜びは、それを読む私たち胸の内もあたたかいもので満たして

くれたような気分がしました。本屋大賞で投票したい本がまた増えちゃったなあ…

——ジュンク堂書店 ロフト名古屋店 石本秀一さん

◆前半の展開からは予想もできない、後半の激しすぎる展開が読んでいて痛々しい部分もありながら、それでもページをめくる手を止められないまま読み終わりました。

——くまざわ書店 南千住店 阿久津武信さん

◆哀しいくらい懐かしく、燃えあがるように美しく狂おしいほど愛おしい——セピア色の時代の記憶と真っ直ぐなあこがれ、そして透明な志を完全濃縮。過去と未来を力強くつなぎ、迷えるこの世の霧をすべて晴らすパワーを秘めた、これぞまさしく物語の奇跡！抗うことのできない数奇な運命に打ち震えるほど心が動かされた。いま最も筆力が漲っている筆者の新たな代表作となることを確信。問答無用！絶対的にオススメの一冊だ！！

——三省堂書店 営業企画室 内田剛さん

◆エピローグで、涙が流れてしばし止まらず。そして「彼方」は場所だけでなく「時」も隔てているということ、その「時」をつなぐものとして刹那の情熱的シーンが欠かせない構成になっていること、二重の深さに、後を追うようにじんわり別の感動も広がりました。

「涙の後を追ってさらに広がる感動の波」とでも申しましょうか……。

——文教堂書店 R4 1 2 店 太田鉄也さん

◆素晴らしかった、とにかく素晴らしくて、素晴らしくてしばらくは言葉にならなかったです。

溢れる涙をぬぐいもせず、ひたすら読みました。

読み終わった後、この涙の意味はなんだろう、と考えていました。悲しいとかうれしいとか感動したとか悔しいとか。そういう「ことば」を全て超えた、これは多分、命の涙なんだと、そう思いました。

たとえば、人は本がなくても生きてはいけます。でも、人生に、自分のそばに本があればその人生は何倍も何十倍も豊かになります。言葉を読み、絵を眺めるだけでなく、それを手に取り胸に抱きその世界に浸る時間、その全てが私たちの命の源となるのですね。ああ、生きるって素晴らしい。

有賀主筆は私の祖父より少し年上で、波津子は祖母より少し年下。つまりこれは私の祖父母が懸命に生き抜いた時代の物語でした。

美しいものにうっとりとする乙女たち。雑誌の小さなイラストを切り抜き丁寧に紙に貼り自分だけのノートを作る。その時間と心の豊かさ。

父親の外套をほどいて娘たちのコートを作る。カーテンをリボンにし、毛布をスカートにする。そういう生活の（今とはちがう）豊かさ。

言葉を丁寧に話すこと。気に入らない上司であってもウイットに富んだニックネームに様をつけて呼ぶ品の世さ。

そんな豊かで美しい時代が、戦争という狂気によって踏みにじられていく。悲しい。悲しくて苦しくて悔しくて。

美しいものを美しいと言えること、好きなものを好きだと言えること、そんな当たり前の幸せを私たちはもう少し大切にしなければならないのでは。

もう二度とこんな哀しい思いをする乙女を生まないために考えなければならないのでは。有賀主筆の孤高の信念、純司様の優しさと美意識、波津子の泥臭いけれど地に足着いた豊かさ、そんなたくさんの宝を私たちは守っていかねばならぬのですね。

この世に生きる全ての友へ、私も一冊の本を届けて生きたい。元乙女として、いや、今も心に乙女を抱いて生きる一人の書店員として。

ああ、もどかしい。この想いをどう伝えればいいのか。うまい言葉が浮かびませんワ。

ただ、一言言えるのは、この物語は宝です。この世界の光となり人を導く宝デス。

——精文館書店 中島新町店 久田かおりさん

◆久しぶりに本を読むのを止められなかった。

止められないまま、あわただしく一気に読み切ってしまった。

ちょっとこれは凄まじく素晴らしい本ですよ。

読んでいる最中も、**読み終わってからの今も、興奮がさめやらない。**

舞台は昭和一二年から二十年にかけての出版社。その出版社では少女雑誌「乙女の友」を作っています。その編集部に「乙女の友」が大好きで大好きでしかたない、佐倉波津子が飛び込んでくるところからこの爽快な物語は始まります。

エリートだらけの編集部で学の無い波津子が落ち込んだり喜んだり、涙したり笑ったり、そんな働きぶりを見ているだけでもわくわくするが、当時の「乙女の友」編集部の様子が最高に興味深いのです。

過去、小説にその才能のきらめきを見せて、しかし現在は若きカリスマ主筆をつとめる有賀憲一郎。その有賀が才能を見出し、有賀と共にゴールデンコンビとして

「乙女の友」の表紙や挿絵でその黄金時代を築いていく画家、長谷川純司。この二人を中心にして、波津子の周りではドラマが展開していきます。

ゴールデンコンビ二人が最高にかっこいいですよ。

乙女でなくても憧れてしまいます。そのほかの登場人物も全員が生き生きと描かれ、魅力的なことこの上ない。「乙女の友」の良い時代、少しも読者を飽きさせません。

しかし、日本は戦争に突入する恐ろしい時代にさしかかっていきます。

戦時中の日本では娯楽は厳しく規制され、雑誌を出し続けるためには戦意高揚のための記事や読み物が求められ、

あの、楽しくきらびやかでときめくような「乙女の友」ではいられなくなってしまうのです。

本当に恐ろしい時代です。でも、今の日本がこのような状況にならないとだれが言えるでしょう。私は正直怖いのです、こんな時代が迫ってきているのではないかと
思ってしまいます。なにがあろうと文化の火が途絶えてはいけません。
雑誌と本がその文化を担っていることは明らかなのですが、
今私たちはそれらを余りにも軽んじているのではないのでしょうか。
本を読むということは、他人の考えを知ることです。
そうして他の人や文化を知ることでは世界を知り、わかりあえるのだと
思います。
想像力を広げ、世界とわかりあう為には雑誌と本はなくてはならないものです。
戦前、戦中、戦後「乙女の友」と波津子はどうなっていくのでしょうか。
どうかこの本を読んで知ってもらいたいのです。
彼方の友へ最上のものを届け続けるために奮闘した熱き人達のことを。
そしてこの世に文化とときめきがいかに必要であるかということ。
この本、凄いです。熱いです。読み継がれるべき大切な本です。
——広島蔦屋書店 江藤宏樹さん

◆戦争、という言葉を使うと、一気に遠くなる。

砲弾の衝撃とか、銃声のやかましさとか、血の匂いとか、死体の惨たらしさとか…そういうものを、僕たちは知らない。戦争という言葉を使ってしまうと、だから一気に、遠い世界の出来事に思えてしまう。そこに、リアルを感じる事が出来なくなる。

戦争、という言葉を使うのを止めてみればいい。例えば、日常の喪失、ならどうだろうか？

色々な日常を生きている人がいる。辛い日常を生きている人もたくさんいるだろうけど、しかし辛いことしかない、という人はそう多くはないはずだ。子育てをしている人、youtubeをいつも見ている人、アイドルや野球球団を応援している人、花を育てている人、絵を描いている人、旅をしている人、恋をしている人…。戦争というのは結局のところ、そういう日常を失わせるものなのだ。そう考えると、一気に戦争が身近なものに思えてはこないだろうか？

僕らの日常は、実に不確かな足場の上に構築されている。それは、「今自分たちがいるこの場所は日常なのだ」という思い込みの集積でしかない。僕らの目の前に、まるで無限に続くかのように思える形で存在しているように思える日常というのは、あるいは、二枚の鏡の間に立っているだけのようなものかもしれない。ちょっと前後どちらかに進んだら、鏡にぶつかってそれ以上進めなくなってしまうような。

『(雑誌の付録の) 小道具の外国趣味もほどほどに。現実から目をそむけて、叙情的なもの

に溺れるのは読者の心を脆弱にする』

『ねえ、間違っていてよ。あなた方の誰も、お父様やお兄様が戦地に行っていないの？ 恥ずかしいと思わなくて？ 自分の身を飾ることばかり考えて』

雑誌の付録か華美だろうが、自分の身を飾ろうが、今の世の中では問題ではない。日本が戦争に突入する前も、そうだった。しかし、戦争が始まると、人々の考え方が変わる。ちょっと前まで「日常」であったものが、はっきりとした変化の兆しに気づけ無のまま、いつの間にか「日常」から排斥する力が生まれてくるのだ。

『どれほど現実が冷たくとも、誌面を眺めるひとときだけは温かい夢を。そうした思いが許されない時代が来たのかもしれない。』

あなたの日常の中で、これがあるから頑張れる、というものを思い浮かべて見てほしい。そして、あなたの原動力になっているそれについて、「今の時代では不謹慎だ」と言って奪われてしまうことを想像してみてください。

その想像の中にこそ、僕は「戦争の本質」があるのだと思う。

『希望です。新しい靴や服がなくても、ひもじくても、そこに読み物や絵があれば、少しは気持ちもなぐさめられる。明日へ向かう元気もわいてきます。』

本書は、戦争の足音を聞きながら、少女に向けた雑誌を作り続けている人々の物語だ。雑誌や物語に関心を持つ人にはそれだけで興味深いだろう。しかし、本書をただそれだけの物語として捉えるのはあまりにも狭量だ。本書では、「少女向けの雑誌」は「日常を彩るもの」として描かれる。そしてその「日常を彩るもの」を生み出すのにどれだけの情熱を注いでいるか、また、「日常を彩るもの」がいかにか奪われうるかということを描き出していくのだ。

『子どもから大人になるわずかな期間、美しい夢や理想の世界に心を遊ばせる。やがて清濁併せ呑まねばならぬ大人になったとき、その美しい思い出はどれほど心をなぐさめ、気持ちを支えることだろうか。そうした思いをもとにこの雑誌は続いてきたはずだ』

『だけど僕らは切腹も殉死もしない。生き残ることを選ぶ。なぜならこの雑誌は少女、乙女の友だからだ。たとえ荒廃した大地に置かれようと、女性はそれに絶望して死にはしない。一粒の麦、一握の希望、わずかな希望でもそこに命脈がある限り…女たちはそれをはぐくみ、つなげていく。』

はいつくばろう、ぶざまであろうと、有賀がつぶやいた。

「未来へつなげていくことに光を見出す。それが女性たちの力だ。僕らは男だけれど、女性

にはそうした力があることを今だから声を大にして伝えなければいけない。なぜなら彼女たちの声は今あまりに小さく、あまりにか細い。この時代のなかで簡単に潰されてしまうから』

「日常」は、いつだってあっさり奪われ得る。そのことを、僕たちは「日常」の中にいると忘れてしまう。本書は、「日常」は決して「当たり前」と同義ではないと意識させてくれる作品なのだ。

本書の舞台となる「大和之興行社」のモデルは、本書の出版社である「実業之日本社」であるという。「乙女の友」という雑誌のモデルは、同社が出していた伝説の雑誌「少女の友」だという。本書で描かれていることが、どれだけ現実や時代の雰囲気を取り切ったものなのか、僕には判断が出来ない。しかし、「少女の友」を出版した出版社から本書が出る、ということから考えてみても、かなり当時の雰囲気を醸し出している可能性は高いのではないかと思いたくなる。そうか、こういう時代が、本当にかつてあったのか、という嬉しさみたいなものが、湧き上がってくるような気がするのだ。

——さわや書店フェザン店 長江貴士さん